

地域で食と農を考えるための学習 広島県甲山小学校の米作り体験を事例として

松 田 絵 美・四 方 康 行

(2004年5月10日原稿受付) / (2004年5月13日原稿受理)

Learning to think about foods and agriculture in the region
A case study of rice farming experience in Kozan elementary school

Emi MATUDA Yasuyuki SHIKATA

1 は じ め に

戦後、国民の食に対する価値観が、生産することから、購入することへ変化し、「食と農の距離が遠くなった」といわれている。食と農との距離は、地理的だけではなく、時間的にも社会的にも生産地から遠く離れているということである。その背景には、戦後の農村から都市への人口移動、所得の増加、スーパーマーケットやコンビニの急進、外食産業の発達、食関連電気製品の急増、女性の社会進出などがあげられる¹⁾。近年では、国民の健康志向の高まりや、BSEの発生、食品会社の不祥事などから、食品の品質や安全性に対する関心が高まってきている。これらのことより、2002年に農林水産省が公表した「食と農の再生プラン」では、トレーサビリティの導入や食品の品質表示への対策が強化されている²⁾。しかし、これらは、消費者を中心にした取り組みであって、農への視点が見落とされている。特に都市部では、生活の中に自然とふれあう機会がなく、食べ物がかどのように作られているのかを考えることが少なくなり、食と農の間のつながりが理解されにくくなっている。

このような状況の中で、近年、農業の教育力³⁾が認識され始め、農作業を通して土や生き物の『いのち』を実感し、食べ物や農業について理解を深めていく「食農教育」が注目されている⁴⁾。食と農に関する教育は、子供の頃からの学習が重要であるとされ、都市部、農村部に問わず、学校教育の総合的な学習の時間に取り入れられるようになってきている。また、この食農教育によって、子供達の豊かな人間性の育成、農業・農村の理解と振興、身近な地域資源の活用、地域住民との交流が期待されている。

本稿では、まず農作業体験学習が地域社会や学校教育の中でどのように位置づけられているのかを整理する。特に、農村部の農作業体験学習は、地域の農業を考える上で非常に重要なものになっていると考え、農村部の小学校に焦点をあてる。次に、子供達が農作業を通して感じた食と

農のつながりに注目し、子供達への食農教育の効果を明らかにする。また、その保護者が学校の農作業体験に求めることを調査し、子供達の食農教育に必要とされる地域のあり方を示すことを目的としている。

2. 食農教育の広がり

(1) 食農教育とは

食農教育とは、植え付け、収穫、加工等の農作業を体験することを通して、自らの食生活を考え、毎日食べている物が、誰かの手によって作られていることや、生産過程を知ることによって食べ物「いのち」を認識し、農業や食べることについて考えていく学習である。食農教育という言葉は、財団法人農山漁村文化協会が1987年8月に創刊した『自然と人間を結ぶ「自然教育活動」』の42号と、1958年9月創刊『農村文化運動』の146号の合併号(1997年11月)から使い始めている。その合併号の特集のタイトルは「食農教育で授業が変わる学校が変わる」であった。そして次の『自然と人間を結ぶ「自然教育活動」』の43号(1998年2月)は「食農教育の事例と展望」を特集に組んでいる。そして「自然教育活動」という誌名は43号でなくなり、1998年8月に『自然と人間を結ぶ』1998年5・8月合併号として『食農教育』という雑誌(季刊)が創刊され、「食農教育」という言葉が広く知られ、使われるようになった。⁵⁾ これらの雑誌は、「食と農」を切り口に学校の授業や給食の時間を進めていくために地域がどのように関わっているかを紹介する総合誌である。現在「食農教育」は、農村の役割を見直すこと、国民が食と農への理解を深めること、農作業に携わることによって子供達の豊かな人格が形成されることを期待して、農業関係の人々によって広く使われるようになり、食農教育の取り組みも広がっている。

食農教育が子供達に必要とされている背景として、農業と食の関係、そして教育的な観点が挙げられている⁶⁾。社会的に「食と農の距離が遠く」になっており、自分達が食べているものが何であるかを考えることがなく、食べ物がどこでどのように作られているかを知らず、スーパーなどに行けば売ってあるものだと考えている子供達が増え、食べ物の大切さについて考えていくことが必要とされている。特に、都市部の子供達は、農業や自然にふれることがなく、「食と農のつながり」を身近なこととして考えることができない。

教育的な観点としては、複雑な社会環境の下で、子供達の健全な育成に力を入れ、21世紀を「生きる力」を育むために、学校教育を知識つめこみ型の教育から、子供達の個性を伸ばすための体験重視の教育への転換が行われている⁷⁾。体験学習は、子供達が主体的に考え、判断し、行動できるような人間性、個性を重視した教育を行うために非常に重要だとされている。その中でも、注目されているのは、農作業体験学習である。農作業は、人間の成育に大きな力を発揮すると言われてきた。1970年代から、学校教育において学校農園の活用、林間学校、農業体験、山村留学等が行われていた。しかし、それは一部の小・中学校での動きであり、当時は、農業・農村の持つ教育的機能が注目され始めたばかりで、国民や学校教育で行っていくには時間がかかった。

1985年に設けられた「農業・農村と教育に関する懇談会」⁸⁾によって、農業を積極的に教育に取り入れようとする動きが教育界に見られた。この懇談会では、もともと自然の一部であった人間の「土離れ」が都市生活にもたらした弊害に対して、農業・農村の持つ多面的機能への期待が述べられている。この懇談会で検討されたことは、農業・農村に期待される教育的機能、農業・農村や自然に関する国民の理解を深めるための幅広い教育のあり方、次代の農業・農村を担う世代の教育のあり方、である。このような時代の流れがあり、2002年に創設された「総合的な学

習の時間」は、実際に体験学習を行い、それをもとに教科に還元していくことが目的とされている。農作業体験学習は、子供達の「生きる力」を引き出すものとして積極的に取り入れられ始めている。

農作業体験は生産だけではなく、総合的な学習の時間の横断的な学習に最適である⁹⁾。また、総合的な学習の時間のテーマは、各学校の特色を活かして行われ、教科書だけの勉強だけではなく、地方分権や地域共同体（コミュニティー）の再生など社会的に問題になっていることをより身近に捉えるために、身近な資源を活用していくことである。ここに、食農教育が身近な問題として総合的な学習の時間に取り入れられる重要性がある。

（2）農作業体験学習の位置づけ

食農教育は、現在の食と農業問題を考えるために、将来、より複雑な食料問題を理解していく手助けとなる。そして、子供たちの豊かな心の成長に向けて、取り組みが行政の連携を通して行われている¹⁰⁾。

1998年12月に農林水産省と文部科学省が連携し、「文部科学省・農林水産省連絡協議会」を設置し、子供たちの農作業体験学習を充実させていくために支援をしている。その連携事業の中には、以下のようなものがある。

青少年が農家等で長期間、農作業体験や自然体験学習に取り組むための支援

子供たちの豊かな人間性を育むために、地域の身近な環境をテーマに、子供たちが自ら企画する、農作業体験学習の推進

子供達が豊かな遊びを体験できるように農業用水路の登録、利用促進、整備等をおこなう「あぜ道とせせらぎ」づくりの推進

農林水産省は、農作業体験によって子供のときから食と農の理解を促すことと、将来の担い手確保に向けての教育に重点を置いてきたといえる。1998年の「農政改革大綱」で、「学校5日制が完全に実施される2002年に向け、食教育や農林漁業・農山漁村体験学習の充実方策を検討」、「小中学生の農業に対する理解を深めるため、小中学校における農作業体験学習への取り組みを促進」という方策を出している¹¹⁾。

農業教育の振興において主に、小・中学生等を対象にした以下のような施策が行われている。

地域内及び地域間の連携による農業体験学習を推進するため、モデル市町村における農業関係機関と教育機関の連携を支援

教員に対する研修、支援センターの設置、農業に関する情報のWeb上での提供

農業体験学習を全国的に展開するために、事例発表コンクールの開催、子供たちの農業理解のための副読本作成、図画コンクール等の啓発活動を支援すること

文部科学省は、体験活動を重視した取り組みを支援する観点から、2002年度から「豊かな体験活動推進事業」を実施している¹²⁾。この事業は、学校や学年に応じた計画的な体験、体験学習の時間の確保、関係機関や保護者等の支援組織を作るものである。

2003年度からは、環境の異なる地域に出かけて行う体験活動の推進を図るために、「地域間交流推進校」を設け、都市部から農村部に出かけ農林漁業体験を行う共生・対流に力を入れている。

以上のように、文部科学省では、子供達や保護者への農業体験学習の参加を促し、農林水産省では、農業体験学習充実のための基盤作りを担っているといえる。

その他にも、消費者と生産者との間で食や農業・農村についての情報や交流を支援、促進する

広範な有識者のボランティア団体である「食と農の応援団」を組織し、シンポジウムなどが行われている¹³⁾。また、農業協同組合中央会では、子供農業・農村体験の情報の窓口になる等、全国的に農業体験学習への取り組みが推進されており、総合的な学習の時間への期待が高まっている。このような情報をもとに、都市や農村に関わらず情報交換を行い、双方のメリットを活かし食農教育を地域住民と共にやっていくことが地域共同体の再生にもつながっていきとされている。食農教育の実施は、学校教育だけではなく地域にも大きな影響を与えらる。このような取り組みが広がる中で、地域はどうあるべきかを考えていく必要がある。以上より、食農教育は、子供達の食と農の理解だけが目的なのではなく、農業文化・伝統、歴史を伝えていくためでもある。農村での食農教育は、都市空間の中でつくられた農園ではなく、農空間の中での教育ができ、食と農のつながりを実感しやすい空間である。また、身近にいる農家に指導してもらうことによって、地域の気候、地形を活かした農業のことも理解しやすくなる。このメリットを活かして、農村における食農教育は、生活を基盤にしっかりと行っていく必要がある。また、都市の子供達が農村に来て農業体験学習を行い、都市に帰った時に、自分たちの周囲の農業や自然を見直し、都市住民への農業の理解に発展させられる効果があると考えられる。これらのことを踏まえ、「食」と「農」について学ぶ、農村部の小学校での食農教育について考察する。

3. 広島県甲山小学校での取り組み

(1) 地域の概要

甲山小学校は、広島県の中東部の世羅台地に位置する甲山町にある。甲山町の現在の総人口は6,875人であり、1995年（平成7年）より5.7%減少している。また、年少人口比は13.6%であり少子化が進んでいる。第1次産業が19.8%、第2次産業が29.3%、第3次産業が50.9%である。甲山町は、昔から稲作中心の地域であったが、近年は、郡内の世羅町、世羅西町と世羅高原6次産業ネットワークを通じて観光産業の中心として観光農園に力を入れている。甲山町の農業に対する教育の取り組みとしては、1992年から甲山町内の小学校5校の5年生全員が、バスで町内の近代的農林業施設や農家を見学する授業がある。また、2000年4月に、甲山町を含む世羅郡の小学校では、世羅郡の社会科部会のメンバーが作成した『世羅台地の農業』という副読本を、社会科の時間に使用し、地域農業の理解に向けた取り組みに力を入れている。副読本の作成時に事務局となったのが甲山小学校である。甲山小学校は、標高333.6mに位置し、甲山町の中心的地域に位置している。学校の周囲には、田んぼが広がっており、食農教育には最適な場所である。

(2) 授業の目的と内容

米作りの目的は、農作業を通して食への意識を高めることと、農業が盛んな地域であるが、子供達が地域の様子を知らないため、地域の産業について実際に学習することである。教師は、農業には無駄になるところがないということ、教えようとしている。

また、農作業体験学習は、学校だけでは行うことができず、地域の協力が必要である。地域住民や保護者に参加してもらうが、学校側が受け身になり与えてもらうばかりではなく、学習したことを地域に返すことなどによって、「開かれた学校」づくりを目指している。

授業の内容は、年間を通して米作りの流れをつかむようになっている。作った米は、ひめのもちという品種のもち米である。もち米を教材に使っているのは、普通の米と違って、もちやおこわを作ることができ学習の幅が広がるからである。授業内容は表1の通りである。

表1 授業の内容と体験実施日

月 日	授 業 内 容
5月10日	田植え
7月 中	観察
9月8日	稲刈り、稲をワラで束ねる、はで干し
10月3日	脱穀、精米
10月7日	ポウトウ作り
12月7日	餅つき
12月11日	しめ縄作り

(3) 授業に対する地域の協力

授業で使った田んぼの面積は4 aである。田んぼは、運動場のすぐ裏にあり、付近の農家T氏に田んぼを借りている。T氏が、田んぼを貸した動機は、「自分の子供や孫が小学校に通っており、お世話になっているから、喜んでもらえればいい」ということである。学校の授業では行わない水管理や掃除をし、子供達が、授業時間にすぐ作業が始められるよ

うに準備を行っている。教師は、田んぼがすぐ近くにあるメリットとして次の二点を挙げていた。

米の成長に変化が表れた時、すぐに見に行くことができる。

登下校で目を向けることができる。

また、作業には、学校長や教頭、数名の保護者が授業に参加し、近隣の農家が作業の指導をする形で授業が行われている。授業の中で作ったポウトウ¹⁴⁾も、地域の農家2、3人が子供達と協力して作った。

4. 農作業体験学習で子供達が感じたこと アンケート調査より

(1) 調査方法

調査の対象としたのは、5年生男子16人、女子19人の計35人が総合的な学習の時間に行った米作りである。調査方法は、子供達が米作りに携わる様子を知るために、前年度（2002年度）に米作り授業を担当した教師と、2003年度に担当した教師への聞き取り調査を行い、著者が米作りに参加し、子供達の様子を見て、アンケートを作成した。なお、聞き取り調査を行った教師達は、子供の頃から農業に携わっている。授業に参加したのは、稲刈りからである。ポウトウは、今では、ほとんど作られていない世羅地域の特徴的なワラの保存方法である。

アンケート調査は、ポウトウ作りから約2ヵ月後の12月1日に農作業についての項目を実施し、もちつきの翌日の12月5日に食べ物についての項目を実施した。回収率は、ともに100%であった。農作業のアンケートは、著者が教室で読み上げながら行い、食べ物のアンケートは、授業の都合上翌日に教師に行ってもらった。また、保護者へのアンケートは、餅つきの後に子供達に持ち帰ってもらい、記入して持って来たものを回収する方法をとった。保護者のアンケート回収率は、51%であった。回答者の属性は、83%が母親で、17%が父親であった。

(2) 農作業の楽しさ

農作業の中で、手作業は、田植えと稲刈り、稲を束ねる、はで干し、ポウトウ作りであった。機械作業は、脱穀、精米であった。子供達に、体験した米作りの作業がどの程度楽しかったかを聞いた。図1より、ポウトウ作り、稲刈り、田植えの順に「とても楽しかった」という割合が多かった。逆に、観察、稲をワラで束にする、はで干し、脱穀、精米は、それぞれ約20%が「あまり楽しくなかった」、「楽しくなかった」と答えている。子供達に、その理由を自由記述で答えてもらった。

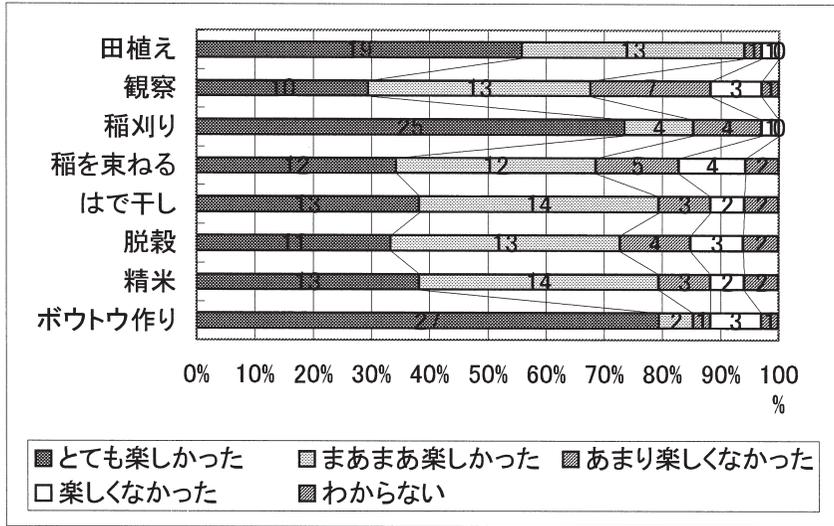


図1 楽しさの度合い (数字は人数)

表2 田植えの楽しさの度合いの理由

	男子	女子
とても楽しかった (男子10、女子9)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 稲を植えるのが楽しかったから (2) ・ 稲をうまく植えられたから (2) ・ だるだるして面白かった (2) ・ みんなとやったのしいから ・ 初めてだったけど、うまくできたから ・ 初めてやったので楽しかったから ・ 忘れた 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 植えていくのが楽しかったから (2) ・ 土がぐにゅぐにゅして面白かったから ・ 気持ちよかったから ・ 土の中に入るのが面白かったから ・ 初めて田んぼに入って、ちょっと興奮気味だったから ・ 大変だったから ・ 初めての体験だったから ・ 楽しかったから
まあまあ楽しかった (男子5、女子8)	<ul style="list-style-type: none"> ・ ずっと低い姿勢だったので、疲れたから ・ 久しぶりだったから ・ ちょっとぬるぬるしていたので気持ち悪かった ・ 泥の中が気持ちよかったから ・ 少し歩きにくかったから 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 少し泥の中が気持ち悪かったから ・ だるだるになりながらも楽しく出来たから ・ 田んぼがぬるぬるして気持ちよかったが、虫がいて嫌だった ・ 手などが汚れたりしたから ・ ヒルがいたけど、楽しかったから ・ 植えるのはまあまあ楽しかったけど、後でだるだるになったのが嫌だったから ・ 土が気持ちよかったから ・ 少し疲れたから
あまり楽しなかった (男子0、女子1)		<ul style="list-style-type: none"> ・ 転んだから
楽しなかった (男子0、女子1)		<ul style="list-style-type: none"> ・ 土がべたべたしていたから
わからない (男子0、女子0)		

() 内は人数、() 書きがない項目は一人

表3 観察の楽しさの度合いの理由

	男子	女子
とても楽しかった (男子6、女子4)	<ul style="list-style-type: none"> ・観察するのが好きだから ・稲の様子を見て楽しかったから ・どのくらい伸びたか気になっていたので見に行くのが楽しかった ・稲などを観察するのが面白かったから ・いろいろなことを見つけられたから ・デッサンが好きだから 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵を描くのが楽しかったから（2） ・育ったところを見ることができたから ・きれいにまとめて書けたから
まあまあ楽しかった (男子5、女子8)	<ul style="list-style-type: none"> ・稲がどれだけ成長したのかわかったから ・成長ぶりがすごかったから ・描いて観察するのが楽しかったから ・しんどかったから ・無記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵を描くのが難しかった ・田んぼの中の稲の様子が変わっていたから ・稲が大きく育っていたから ・いろんな発見ができたから ・1つ1つ見ていくのがまあまあ楽しかったから ・いろいろな生き物がいたから ・成長は楽しみだったけど、あまり観察が好きではないから ・見て描くのがまあまあ楽しかったから
あまり楽しくなかった (男子1、女子6)	<ul style="list-style-type: none"> ・稲の成長のしかたがわかったから 	<ul style="list-style-type: none"> ・あったかくて眠かったから ・文を書くのがあまり好きでないから ・暑かったから ・観察だけだったから ・観察自体あまり好きでないから ・無記入
楽しくなかった (男子2、女子1)	<ul style="list-style-type: none"> ・描くのが面倒くさかったから ・無記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・観察することが楽しくなかった
わからない (男子0、女子0)		

() 内は人数、() 書きがない項目は一人

田植えは、図1より、「とても楽しかった」と「楽しかった」を合わせた割合が、94%と作業の中で一番人数が多かった。表2より、初めての経験で「楽しかった」や、「土の感触が気持ちよかった」ということに楽しさを感じるなど、泥の中に入って苗を植えることが子供達にとって新鮮だったと考えられる。

表3より、観察で稲がどの程度成長したかを実感できた子供は、「とても楽しかった」という評価をつけている。観察が好きでなかったり、絵や文を書くのがきらいな子供は、観察自体は「あまり楽しくなかった」という評価である。特に、女子に観察が「楽しくなかった」人数が多いのが目立つ。

図1より、稲刈りが「とても楽しかった」と「まあまあ楽しかった」を合わせた割合は85%になる。鎌を初めて使う子供が多かった。表4より、「とても楽しかった」という子供には、「たくさん取れたから」、「簡単に刈れたから」という意見が多く、稲を刈ること自体に楽しさを感じていると考えられる。また、「ざくざく」、「すばすば」切れたから、「とても楽しかった」という表現が多数使われており、子供達の五感を刺激していることがわかる。

表5より、稲をワラで束ねることは、「楽しかった」、「まあまあ楽しかった」という割合が同じであった。「とても楽しかった」と答えた子供達には、「どんどんできた」、「上手にできた」と

表4 稲刈りの楽しさの理由

	男 子	女 子
とても 楽しかった (男子10、女子15)	<ul style="list-style-type: none"> ・すばすば切れて楽しかったから ・初めて稲刈りをしたから ・たくさん刈ることができたから ・手がかゆかったけど、いろいろあって楽しかったから ・友達の鎌を借りるとよく切れたから ・稲を刈るのが好きだから ・前よりうまくできたから ・切りにくかったけど、楽しかったから ・前からやってみたかったから ・刈れて楽しかったから 	<ul style="list-style-type: none"> ・初めてだったから (2) ・たくさん取れてうれしかったから (2) ・稲を鎌で刈るのが楽しかったから ・簡単に刈れたから ・スッパリ刈れたから ・他の人と競争をして刈ったのが、楽しかったから ・とっても楽しかったから ・自分で稲を刈るのが楽しかったから ・ざくざく言う音が面白かったから ・鎌でざくっと切るのが楽しかったから ・手が痛かったから ・初めてやっとうまくいったから ・無記入
まあまあ 楽しかった (男子3、女子1)	<ul style="list-style-type: none"> ・ざくざく取れたから ・疲れたけれど楽しかったから 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しかったけど、腰が痛くなったから
あまり 楽しくなかった (男子2、女子2)	<ul style="list-style-type: none"> ・やるときかゆかったから (2) 	<ul style="list-style-type: none"> ・少しかゆかったから ・暑かったから
楽しくなかった (男子0、女子1)		<ul style="list-style-type: none"> ・手足がかゆくなったから
わからない (男子0、女子0)		

() 内は人数、() 書きがない項目は一人

いう感想が多かった。「あまり楽しくなかった」と答えている子供の中には、農家の人たちに教えてもらったが、「うまく結べなかった」、「結び方が難しかった」という感想を書いている。束ねる難しさが楽しくなかったようである。植える、刈るのように単純な作業ではなかったことと、また、稲刈りの後に続けて行い、疲れや暑さから集中力が続かなかったということも考えられ、積極的に行おうとする子供が少なかった。ただ、「難しかった」という意見の評価は分かれており、「難しかったけれど楽しかった」としている子供がいるが、これは結べた時の達成感のほうに優先されていると考えられる。

表6より、はで干しが「とても楽しかった」と答えた子供には、「簡単だった」、「棒にかけるのが楽しかった」という感想が多かった。一方、「あまり楽しくない」と感じている子供は、「首がかゆくなったから」、「あまりやっていないから」という感想を述べている。田植えや、稲刈りのように全員が同じ作業をするのではなく、個人で考えて動く作業であるので、感じ方が違っていると思われる。

脱穀は、子供が脱穀機のそばまで稲の束を持って行き、機械にかけてもらった。表7より、「とても楽しかった」、「まあまあ楽しかった」という評価の中には、「皆で見るのが楽しかったから」、「米がきれいにとれたから」という感想が見られ、米の変化を楽しんでいることがわかる。また、「まあまあ楽しかった」と答えている子供の中には、「自分でやりたかったから」、「あまり

表5 稲を束ねた楽しさの度合いの理由

	男 子	女 子
とても 楽しかった (男子6、女子6)	<ul style="list-style-type: none"> ・上手にできたから ・皆とやるのが面白かったから ・初めは難しかったけれど面白かったから ・初めてやったから ・昔の人と同じやり方をしたから ・無記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・結構うまくいったから ・どんどんできたから ・楽しかったから ・ちょっと大変だったけど楽しくかったから ・難しかったから ・結ぶのが楽しかった
まあまあ 楽しかった (男子4、女子8)	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単だったから ・楽しかったから ・難しかったから ・難しかったけど、楽しかったから 	<ul style="list-style-type: none"> ・少し難しかったから（3） ・手がかゆくなったから ・前にやって簡単だったけど楽しかったから ・少しわからなかったけどまあまあ楽しかったから ・よくわからなくて、暑かったから ・縛っていたのがまあまあ楽しかったから
あまり 楽しくなかった (男子3、女子2)	<ul style="list-style-type: none"> ・手で束ねるのが難しかったから ・縛るのが難しかったから ・無記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・難しかったから ・虫がひっついたから
楽しくなかった (男子1、女子3)	<ul style="list-style-type: none"> ・かゆかったから 	<ul style="list-style-type: none"> ・やり方がよくわからなかったから ・難しかったから ・面倒くさかったから
わからない (男子1、女子0)	<ul style="list-style-type: none"> ・しんどかったから 	

() 内は人数、() 書きがない項目は一人

表6 はで干しの楽しさの度合いの理由

	男 子	女 子
とても 楽しかった (男子6、女子7)	<ul style="list-style-type: none"> ・初めてやったから ・みんなでやるのが面白かったから ・稲を干していたらしんどかったけれど面白かったから ・簡単で楽しかったから ・無記入（2） 	<ul style="list-style-type: none"> ・棒にかけるのが楽しかったから ・分けていくのが楽しかったから ・並べるのが大変だったが、とても楽しかったから ・暑かったけれどなぜか頑張れたから ・楽しかったから ・簡単だったから ・稲を挟んでいくのが楽しかったから
まあまあ 楽しかった (男子7、女子7)	<ul style="list-style-type: none"> ・疲れたから ・ちょっとしんどかったから ・落ちている稲を拾うのが大変だったから ・いい体験をしたから ・無記入（3） 	<ul style="list-style-type: none"> ・干すのが大変だったから（2） ・少しかゆくなったから ・挟むのが面白かったから ・竹にかけると大変だったから ・簡単であまりすることがなかったから ・棒に引っ掛けるのが楽しかったから
あまり 楽しくなかった (男子1、女子2)	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単だったから 	<ul style="list-style-type: none"> ・足や手にくっついたから ・難しかったから
楽しくなかった (男子1、女子1)	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しくなかったから 	<ul style="list-style-type: none"> ・ほとんどやっていないから
わからない (男子1、女子1)	<ul style="list-style-type: none"> ・無記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり覚えていないから

() 内は人数、() 書きがない項目は一人

表7 脱穀の楽しさの度合いの理由

	男 子	女 子
とても楽しかった (男子7、女子4)	<ul style="list-style-type: none"> ・首がかゆくなったから ・脱穀を見るのが楽しかったから ・皆で見るのが楽しかった ・暑かったけれど面白かったから ・やりがいがあったから ・運ぶのが楽しかったから ・分けきれず少し残っている米を手で分けるのがしんどかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・面白かったから (2) ・皆で見るのが楽しかったから ・楽しかったから
まあまあ楽しかった (男子4、女子9)	<ul style="list-style-type: none"> ・わらでかゆくなったから ・機械を見て勉強になったから ・音が面白かった ・無記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分でできなかつたので残念だったから (2) ・きれいだったから ・米がすごくきれいに取れたから ・簡単だったから ・あまりやらなかつたから ・音がうるさかつたから ・渡してから見るのが楽しかったから ・無記入
あまり楽しくなかつた (男子1、女子3)	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり楽しくなかつた 	<ul style="list-style-type: none"> ・初穀が飛んできたから ・音がうるさかつたから ・粉が飛んできたから
楽しくなかつた (男子2、女子1)	<ul style="list-style-type: none"> ・面倒くさいから ・手がかゆくなったから 	<ul style="list-style-type: none"> ・面倒くさかつたから
わからない (男子1、女子1)	<ul style="list-style-type: none"> ・無記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・おぼえていないから

() 内は人数、() 書きがない項目は一人

表8 精米の楽しさの度合いの理由

	男 子	女 子
とても楽しかった (男子7、女子6)	<ul style="list-style-type: none"> ・精米を見るのが楽しかったから ・精米はきれいだから ・皆で見るのが面白かつたから ・どんどんきれいになるのが面白かつたから ・初が出るところが面白かつたから ・結構白くなつたから ・無記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・初の中に先生を落とすのが楽しかつた ・裏の米の出る所がよかつたから ・きれいな米になるまでを見るのが楽しかつたから ・初が飛ぶのが面白かつたから ・米がきれいになつてうれしかつたから ・米がきれいなものと汚いものに分かれて出てくるのが楽しかつたから
まあまあ楽しかつた (男子4、女子10)	<ul style="list-style-type: none"> ・面白かつたから ・機械を見て勉強になつたから ・無記入 (2) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ざらざら機械から出てくるのが面白かつたから ・見ているだけだつたけれど初が飛ぶのが面白かつたから ・きれいなお米かできたから ・見るのが楽しかつたから ・白米になつたとき嬉しかつたから ・見るのが好きになつたから ・初が飛ぶのが面白かつたから ・ごみの中に落ちそうになつたから ・よくわからなかつたから ・無記入
あまり楽しくなかつた (男子3、女子0)	<ul style="list-style-type: none"> ・少しやることになかつたので暇だつた ・機械でしたから暇だつた ・普通 	
楽しくなかつた (男子1、女子1)	<ul style="list-style-type: none"> ・見るだけだつたから 	<ul style="list-style-type: none"> ・だるかつたから
わからない (男子1、女子1)	<ul style="list-style-type: none"> ・無記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・おぼえていないから

() 内は人数、() 書きがない項目は一人

やらなかったから」という子供がおり、子供達自身で作業を行うことが必要であることがわかる。「楽しくなかった」という理由には、「面倒くさかった」という感想を述べている子供もおり、ずっと同じ作業をすることへの飽きも感じられる。

表8より、精米では、「米がきれいになったから」、「白米になったとき嬉しかったから」、という感想が「とても楽しかった」理由に多かった。子供達が、米の変化を「きれい」と捉えており、子供達は米の変化に対して好奇心が強いということがわかる。しかし、「楽しくなかった」と答えた子供に、「機械でして暇だった」、「見るだけだったから」という感想が見られ、脱穀と同様に子供達自身がやる必要があると思われる。

図1より、「とても楽しかった」と答えた子供の割合が一番多かったのが、ポウトウ作りである。表9より、「とても楽しかった」理由は、「投げるのが楽しかった」がほとんどであった。

表9 ポウトウ作りの楽しさの度合いの理由

	男 子	女 子
とても楽しかった (男子12、女子15)	<ul style="list-style-type: none"> ・投げるのがすごく楽しかったから (6) ・うまくできたので嬉しかったから ・わらを運ぶのが楽しかったから ・新聞に載るほどすごいものだったから ・面白かったから ・無記入 (2) 	<ul style="list-style-type: none"> ・投げるのが楽しかったから (12) ・投げて渡すのが面白かったから (3)
まあまあ楽しかった (男子1、女子1)	<ul style="list-style-type: none"> ・わらを運ぶのが楽しかったから 	<ul style="list-style-type: none"> ・あまりすることがなかった。普通。
あまり楽しくなかった (男子0、女子1)		<ul style="list-style-type: none"> ・わらを投げるだけだったから
楽しくなかった (男子2、女子1)	<ul style="list-style-type: none"> ・面倒くさいから(2) 	<ul style="list-style-type: none"> ・しんどかったから
わからない (男子1、女子1)	<ul style="list-style-type: none"> ・無記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・無記入

() 内は人数、() 書きがない項目は一人

新聞社が取材に来ていたため、ポウトウ作りは「新聞に載るほどすごい」という認識も持たれたようである。しかし、逆に「投げるだけでつまらなかった」という意見があった。自分で作ってみたかったというようにもとれる。

農作業を楽しみと感じるのは、個人によって違うが、全体的に楽しいという割合が高いのは、自分たちで行った田植え、稲刈り、ポウトウ作りである。脱穀や精米は、米の変化する様子に関心が持たれているが、作業という点においては、自分で道具を使い、五感を使う手作業に楽しさを感じたようであった。

(2) 手作業と機械作業

子供達にとって、手作業と機械作業のどちらが魅力的なのかを知るために、「今度米作りを行うときに、田植えと稲刈りを手と機械のどちらで行いたいか」と質問した。図2より、手で田植えをしたいと答えたのは男子で50%、女子で74%であった。図3より、手で稲刈りをしたいと答

えたのは男子で63%、女子で74%であった。次回も、手で田植えと稲刈りをしたいとの回答が多く、手作業に魅力を感じていると考えられるが、男女間に差が見られる。

なぜ、手、または、機械でしたいのかを選択肢を設けて選んでもらった。表10、11より手をしたい男子は、「手でやる方が楽しいから」という回答が多い。手をしたい女子には、「手でやる方

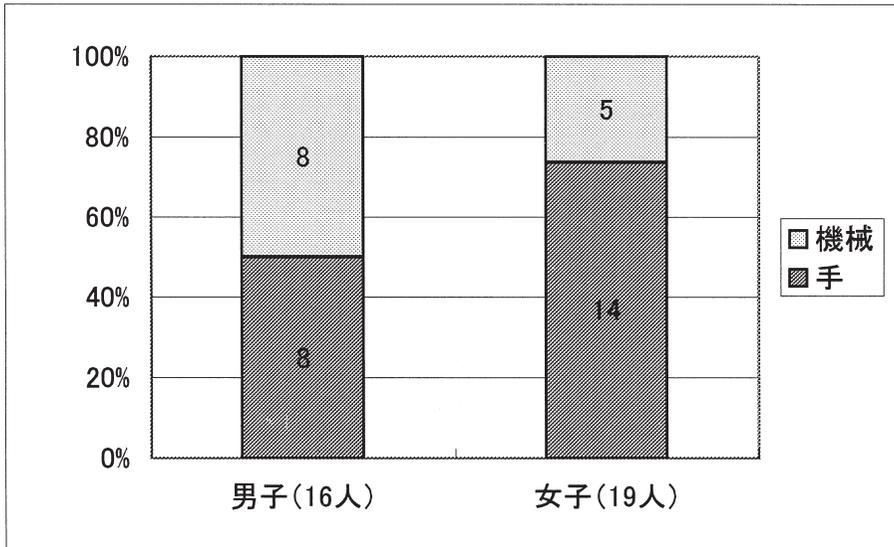


図2 子供達が次に田植えをしたい方法

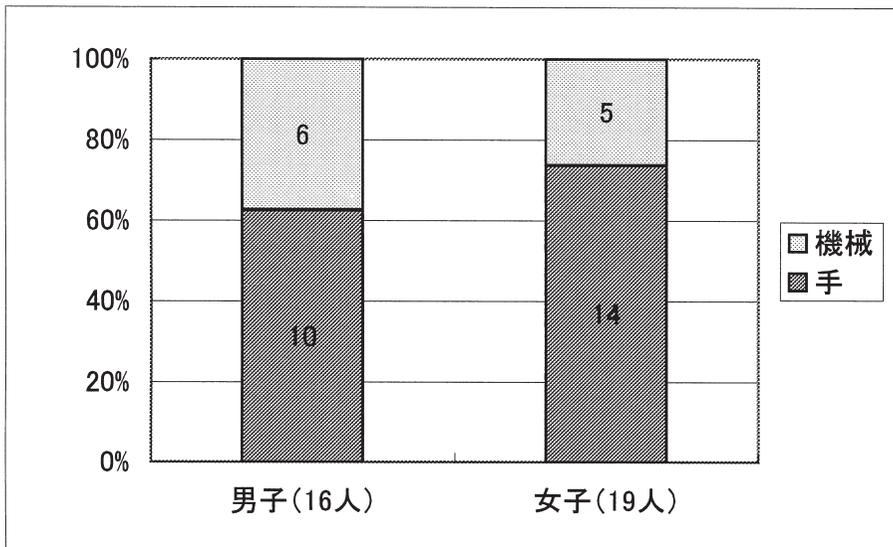


図3 子供達が次に稲刈りをしたい方法

が楽しいから」、「みんなでできるから」の順に多かった。表12、13より、機械でしたい男子は、「機械を動かしてみたいから」、「機械のしくみを見たいから」という理由が多く、機械でしたい女子には、「早く終わって便利だから」という理由が多かった。手で田植えや稲刈りを行うときは、作業の楽しさだけではなく、「みんなで」という要素も必要であると考えられる。機械作業では、手作業に比べて「早く終わる」、「汚れない」という効率のよさを理解し、また、機械を「自分で動かしたい」という、興味や自発性を引き起こさせるものであると考えられる。現代の農業は機械によって営まれることが多い。しかし小学校の農作業体験では、農業の原体験である手作業で自然とふれあうことによって五感を刺激し、感性を豊かにすること、農業の原点を知ることが目的であり、¹⁵⁾ 手作業で行うことが必要である。

表10 田植えを手でやりたい理由

単位：人

手で田植え	男子	女子
手でやるほうが楽しいから	7	7
みんなでできるから	0	4
泥にさわりたいから	1	1
その他	0	2
合計	8	14

表11 稲刈りを手でやりたい理由

単位：人

手で稲刈り	男子	女子
手でやるほうが楽しいから	5	8
みんなでできるから	1	4
鎌を使いたいから	2	1
稲を近くで見たいから	2	1
その他	0	0
合計	10	14

表12 田植えを機械でやりたい理由

単位：人

機械で田植え	男子	女子
早く終わって便利だから	1	4
機械を動かしてみたいから	4	0
汚れないから	1	1
機械のしくみを見たいから	4	0
その他	0	0
合計	10	5

男子に複数回答あり

表13 稲刈りを機械でやりたい理由

単位：人

機械で稲刈り	男子	女子
早く終わって便利だから	1	4
機械を動かしてみたいから	4	0
汚れないから	1	1
機械のしくみを見たいから	4	0
その他	0	0
合計	10	5

男子に複数回答あり

(3) 田んぼの位置

教師は、田んぼが近くにあるメリットを挙げていた。「授業以外で田んぼを見に行ったか」という質問をした所、表14より授業以外で見に行った割合は54%であり、クラスの約半分であった。田んぼは、運動場のすぐ裏であるが、近くにあるメリットがあまり活かせていない。

表14 授業以外で稲を見に行ったか

(単位：人)

	見に行った	見に行っていない
男子	9	7
女子	10	9
合計	19	16

(4) 田んぼの役割

体験を通して子供達が田んぼをどのように感じるかを知るために、「田んぼの役割は何だと思うか」という質問をしたが、質問内容が難しかったため、「田んぼからイメージすることはどんなことか」という内容を付け加え、自由記述してもらった。表15のように回答してもらった内容から、田んぼの役割を「自然」の場と「育成」の場に分けた。子供達の田んぼのイメージは、「空気をきれいにする」、「よい風を送り込む」などの「自然」に関する記入が5人であり、「米を作る」、「稲を育てる」などの「育成」の記入が13人あった。「自然」では、風と生き物に視点が当てられており、田んぼを外から見た風景や「生き物の住処にもなる」というように、田んぼをのぞいたり、入ったりしてわかるような役割も答えられている。「育成」では、田んぼが「稲を育てる」役割を持つと体験を通して認識していることがわかる。このように、田んぼの持つ多面的な機能を理解するのに、農作業体験は役立っているが、一方で、回答で「わからない」が、男女共に多く、体験だけでは言葉に表しにくいということが考えられる。

表15 子供達が考える田んぼの役割 (自由記述)

単位：人

	田んぼの役割	男子	女子
自然	・空気をきれいにする	1	0
	・良い風を送り込む	1	0
	・稲を育てて空気をきれいにする	0	1
	・トンボが飛ぶ所	0	1
	・生き物の住処にもなる	0	1
小計		2	3
育成	・食べ物を育て人を助けている	0	1
	・家族のために米を作る	1	1
	・米を作る	4	3
	・稲を育てる場所	0	1
	・米を育てる場所	0	2
小計		5	8
その他	・いいこと	1	0
	・わからない	8	8
小計		9	8
合計		16	19

注) 複数回答あり

(5) 「いただきます」の認識

子供達は自分達が育てたもち米で、杵とうす、餅つき機を使ってもちを作った。子供達がもちを食べたとき、「いただきます」を誰に言ったかという質問に自由記述で答えてもらったところ、図4より、食べた「もち」が40%で一番多く、その他の対象がもちと一緒に作った「保護者」等になっており、作業過程にも考えが及んでいることがわかる。次に、「いただきますを何のために言ったか」を自由記述してもらった。図5より「いのちあるものに感謝するため」が45%と一

番多く、「いただくから」、「作ってくれた人に感謝するため」という回答もみられる。自分達が育ててきた稲が生きていると認識し、食と農の間の「いのち」を実感している。また、「感謝する」という気持ちも育っている。「いただく」ということを、体験を通して考えることができ、食べ物への意識を高めるといふ食農教育の効果が表れたと考えられる。

しかし、「田んぼの役割はなにか」と同様に、「いただきます」を何のために言うか「わからない」と答えた子供が多い（22.2%）。アンケートをとったのが、稲刈りから2ヶ月程期間が空いていたことも原因の一つであると考えられる。また、総合的な学習の時間には、英語や算数も行われ、作業と作業に間に時間が空き、その間は米についての学習がほとんどなかったため、農作業の過程が、食べることと結びつきにくかったということが考えられる。

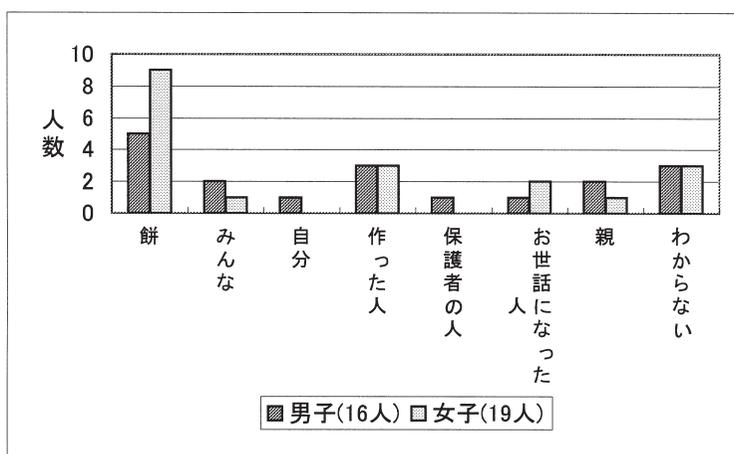


図4 「いただきます」の対象 自由記述

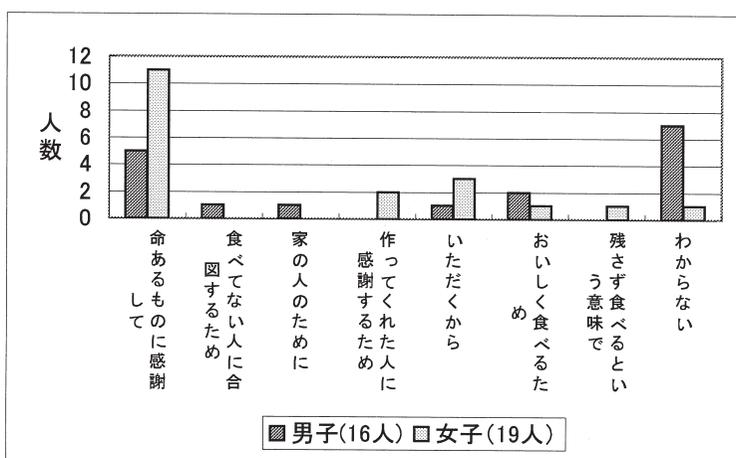


図5 「いただきます」の意味 自由記述

5. 保護者が農作業体験に求めること アンケート調査より

(1) 保護者が子供の頃の体験

子供達の保護者が、子供の頃住んでいた場所は、甲山町、農村、都市と中核的な都市の順に多かった。図6より、子供の頃の家が親戚も含め、農家であった割合は高いが、図7より現在、家が農家である割合は、28%であった。

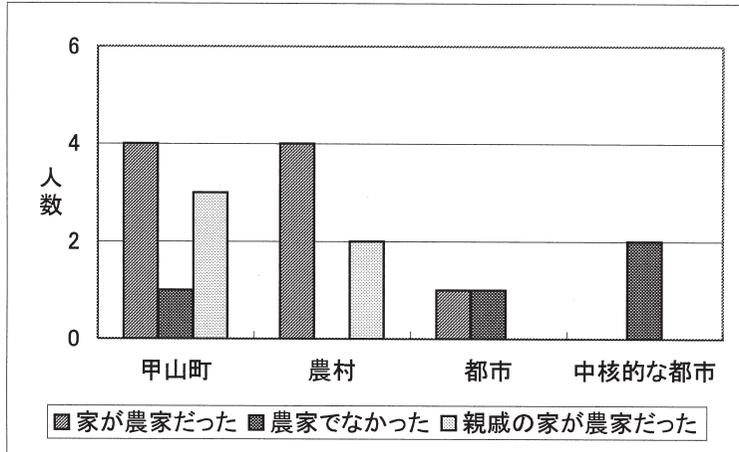


図6 保護者の体験 住んでいた場所別に示した

また、図8より保護者が小学生時代に、学校で農作業体験の授業があった割合は、50%であったが、その中でも甲山町内の小学校で授業があった割合が高い。都市部の学校では行われていなかったことが指摘でき、保護者世代の食や農の学習が重要になってくるのがわかる。保護者が小学生であったのは、1970年代であろう。農業の教育力がまだ、認識されていない時期であったことから、都市部で行われていなかったことも考えられる。

一方、甲山町で体験が多かったことが目立つ。この時期、世羅台地では、米作りだけでは農業経営が成り立たないことから、観光農園が多数でき、地域の農業に新しい動きがあった時代であった。農村では、農業の変化をいち早く知ることができ、農業への理解を促す教育が学校にも反映されやすかったことが考えられる。

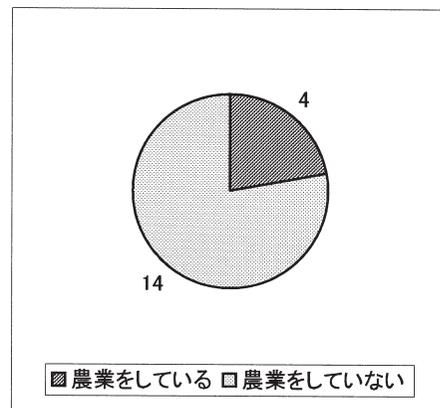


図7 結婚後、農業をしているか

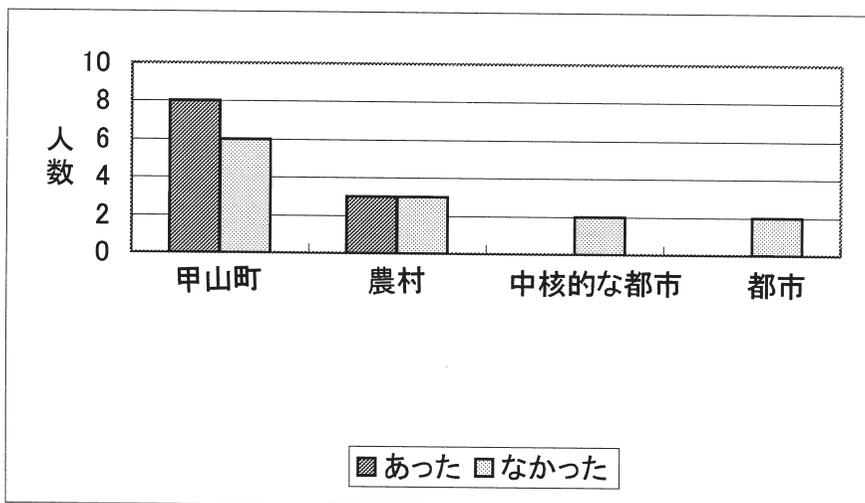


図8 保護者が小学生時代の農作業体験学習の有無

(2) 家庭での学習

農作業を行って、子供達と「家で食べ物について話すことが多くなったと思うか」という質問に対し、図9より、「多くなったと思う」が44%であり、半数以下であった。学校の体験を日常生活と結びつけ、農業や食の会話をしていくことが容易ではないことがわかる。親からの働きかけを多くし、農作業体験の意義を保護者が考える必要がある。

(3) 学校の農作業体験に求めること

次に、保護者に、「学校の農作業体験学習に望むこと」を自由記述してもらった所、表16より意見が、「体験の継続」、「食べ物大切さ」、「農業の楽しさ」、「子供達の自立心が育つこと」、そして「自分の地域のこと」の項目に分けられた。体験の継続や、全学年での体験を行っていくことが子供達にとって必要だと保護者に認識されている。

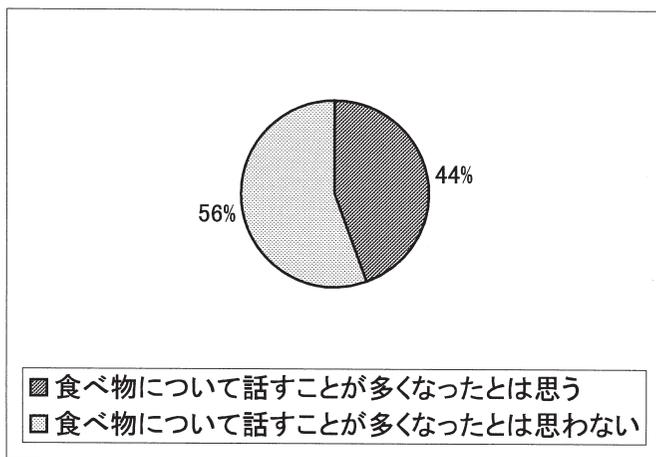


図9 家で食べ物について話すことが多くなったと思うか

食べ物の大切さは、家でも学んでいけるが、家が農家である割合が低いいため、農作業を通した食と農のつながりや、農作業体験や農業の「楽しさ」を家で教えていくことは難しく、これらのことが学校の授業に求められている。また、ポウトウのように地域の歴史や文化も学校で伝えられ、学校での農作業体験の授業が、子供達や地域にとって貴重であることがわかる。

表16 保護者が農作業体験学習に望むこと

体験の継続	<ul style="list-style-type: none"> ・高学年だけでなく、全校生徒での体験。 ・今年体験したことをまた行うこと。 ・農業体験の場が減少しているため、学校側で続けること。
食べ物の大切さ	<ul style="list-style-type: none"> ・できた作物を無駄にせず、活用すること。
農業の楽しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・機械化が進んだ家の農業ではできない体験を楽しむこと。
自立心	<ul style="list-style-type: none"> ・参加している大人に頼るのではなく、自分達でできることは、自分達でやろうという気になること。
地域のこと	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の特産品や、郷土料理のことを学習すること。

6. おわりに

本稿では、子供達が農作業を通して食と農のつながりをどう感じたかを明らかにした。

農作業については、子供達が楽しいと感じる農作業は、「みんなで」（特に女性）、そして「自分の力で」行うことであった。特に、大勢で行えることは、学校での体験のメリットである。農作業を魅力的と感じるかどうかは、子供達の気持ちしだいであるが、農作業のつらさを強調した体験ではなく、子供たちにとって楽しさを感じさせる授業であることが、農作業や植物に興味を持つきっかけになると考えられる。また、田んぼを風景ではなく、米を作る所と田んぼが食料生産のはたらきを持っていると認識している。しかし、日常見ている田んぼであるが、田んぼの役割が「わからない」と答えた生徒が多く、周囲に田んぼがあるだけでは、田んぼがどのような働きをしているか認識されていないことがわかった。

次に、精米をするまで、どう米に変わるかを体験したことがなかった子供達が、「いただきます」を言う時に米から姿を変えたお餅を、「命あるもの」と捉えている。部分的な作業ではなく、田植え、収穫、加工、食べるという一連の生産体験で、子供達が食と農の「いのち」のつながりを実感できていると考えられる。一方、「いただきます」の対象や何のために言ったか、「わからない」という割合も高い。食への意識を高めるといふ目的は、体験だけでは難しいことがわかる。農村部の子供達でも生活の中に農業がないため、体験だけではなく、体験の意味を見出す学習が必要であることがわかる。総合的な学習の時間は、より身近な地域での学習や、理解が期待されていることから、学校だけの取り組みにするのではなく、日常過ごしている家庭での学習が非常に重要である。

保護者が子供の頃、農作業体験が学校であったかは、地域性や時代の流れが感じられる。現在は、農業の教育力が注目され、子供達にとっても、地域にとっても農作業体験が必要とされている。甲山小学校の米作りの環境は、借りている田んぼの周囲も田んぼに囲まれており、地域や保護者の協力も得られており、食農教育には最適な環境がそろっていると考えられる。農作業の楽しさや、食べ物の大切さは、言葉には表されなくても子供達が実感したと思われる。学校側も保護者や地域に協力を求め、保護者も学校側に子供達の学習を求めている。これらのことから、学校と地域住民が共に学習できる「場」が必要であることがわかる。特に、甲山小学校は、積極的に保護者に参加してもらおうという姿勢を表している。保護者も、子供達と共に学んでいく姿勢を持つことが必要である。

食農教育は、子供達が農業にふれることで、食べ物に感謝をする気持ちが育ったかが重視されている。今後、学校も地域も身の周りに広がる農村空間を活かして、食や農についての会話や問いかけを子供達に行っていく必要があるだろう。学校を中心に考えた時、すべて支援された単発的な「体験」だけになる可能性が高い。食農教育に必要とされている農家や地域住民の協力を地域生活にも向け、食農教育の目的や復活させた伝統の情報発信を行う必要があり、地域住民も子供達と同様に食と農について学んでいくことが重要である。農業の機械化が進む中で、自然とふれあいながら行う農業が、子供達にとって必要である。子供達に学んでほしいことこそ地域が考えていかねばならない課題である。

注

- 1) 杉田浩一「食に対する意識の変化」『食料白書 食生活変容の潮流』農文協、1997年 pp.23 - 39
- 2) 平成14年度版『食料・農業・農村白書』農林統計協会、2002年、特集pp.11 - 32
- 3) 農業と教育について論じている著作を以下に示す。
七戸長生他『農業の教育力』農文協、1990年
加藤一郎監『教育と農村』地球社、1986年
祖田修『農学原論』岩波書店、2000年、pp.133-135
- 4) 農文協編集部「進めよう！食と農からの教育改革」『食農教育創刊号』農文協、1998年pp.118 - 125
- 5) 『自然と人間を結ぶ』は『農村文化運動』（1958年9月創刊、その前身は1956年6月創刊の『農村文化運動情報』）、『農業教育』（1967年5月創刊）、『地域活動情報』（1985年8月創刊）を合併し、1987年4月から月刊誌として発行されている。「自然教育活動」が新たに加わり1987年8月に『自然と人間を結ぶ「自然教育活動」』の1号が刊行された。その後、『食農教育』が1998年に創刊されることにより「自然教育活動」は43号でなくなるが、現在は、『自然と人間を結ぶ「農村文化運動」』、同「農業教育」、同「食文化活動」、同「21世紀の日本を考える」が刊行されている。
- 6) 新山雄次「『豊かな体験活動推進事業』の目指すもの」『自然と人間を結ぶ「21世紀の日本を考える」』第20号、農文協、2002年、pp.12-16
- 7) 小林辰至「『総合的な学習の時間』と環境教育」『環境教育への招待』ミネルヴァ書房、2002年、pp.191-197
- 8) 1985年に加藤一郎氏を座長とする9人の委員で国土庁地方振興局から委託されている農業・農村の果たす役割の調査の一環として設けられた。
加藤一郎監修『教育と農村』地球社、1986年
- 9) 佐藤広也・三ツ矢和仁・藤巻 稔・川瀬健一・奈須正裕 座談会「総合で育てたい力」『食農教育』農文協、2002年、pp.22-440
- 10) 根岸久子「学校給食と食農教育 - 学校給食の多様な可能性を食農教育に活かすために」『農林中央金庫総合研究所レポート』6月号、2002年
- 11) 平成14年度版『食料・農業・農村白書』農林統計協会2002年、pp.232-233
- 12) 野村文昭「子どもたちの農業体験学習の目指すもの」『自然と人間を結ぶ「21世紀の日本を考える」』農文協、2002年、pp.22-27
- 13) 農文協ホームページ
URL:<http://www.ruralnet.or.jp/>
- 14) ポウトウは、世羅地域の伝統的なワラの保存方法である。まず、干していたワラをはでから取り、立て

ていた棒の周りに運ぶ。最初は低い位置で棒の周りにワラを結んでいたが、位置が高くなると、束になったワラの上に手伝いに来ていた農家のおじさんが登り、束ねたワラの上で作業をし出した。生徒たちは、下からワラの束をおじさんに投げていく役目を担っていた。

- 15) 塩原孝茂 「生活科における自然体験の意義と改善の方向」 『信州大学教育学部教育実践研究』 第3号、2002年、p.22